
ある雨の降る丘に。

空気

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある雨の降る丘に。

【Nコード】

N4193D

【作者名】

空気

【あらすじ】

なんら変わることのない時間の流れ。どんなに急ごうがソレはゆっくりと何事もないように流れていく。そんな田舎が、そんな場所が嫌いだ。何に対しても無になってしまった少年とある少女の物語。

0 話

これは、僕が子供の頃のお話。

周りを見渡せば一面の緑。

空を見上げれば広がる青。

高い建物などテレビの中の存在で、携帯電話なんて欲しいと思った事がない。

耳に聞こえるのは虫や木の囁き。

都会の人から見れば羨ましがられるかもしれないが、僕からしてみれば何の楽しみもないド田舎。

僕はこの場所が嫌いだ。

変わることはない風景、人の顔、何もかもが嫌で。

そんなある日、小学校の卒業を前に父から報告があった。

田舎を出て都会で昔からの夢だった喫茶店を開きたい、だから都会に引っ越すと。

こんな田舎から抜け出せる、そう思うとワクワクが止まらなかった。

卒業の日、式が終わり友達である二人の幼馴染に別れの挨拶をした。

寂しさなど微塵もない。

悲しさなど欠片もない。

ただ、ワクワクしていた。

父親の運転する車に乗り

周りの風景を見ながら

新しい場所へと向かう

見渡す野山の田舎からモノに溢れた街へつ移っていく。

この街に住んで4年目の夏を迎えようとしていた。夏休みを4日後に控えた学校の帰り道、俺の隣には彼女と呼ぶのかもしれない女。彼女と言ってもたまたま田舎で住んでいた時の知り合い。名前は^{おお}大^{みち}道^あ葵^い。

俺は曖昧であったが、彼女はしつかりと覚えていたようで、出会って二日で告白されその場の流れで付き合ってしまった。

だから好き？と聞かれたらなんて答えていいかわからない。そんな関係を3ヶ月も続けている。

しかし葵はそんな俺を試すように言った。

「太祐君はさ、私の事好きで付き合ったの？」
たすけ

まさかの質問。しかし俺は迷う事無く

「わからない」

と答えた。嘘ではない。好きで付き合ったわけでないし、嫌いだから一緒に居ないし。だから分からないと答えた。

「……………ひどい」

そう言葉を残し、葵は走って行ってしまった。

いつからだろう、何に対してもやる気が感じなくなったのは。この世界に魅力を感じなくなったのは。

田舎が嫌で抜け出せて、この都会では楽しい生活が待っているはずだったのに。

住めば都。あそこにいた時と比べると変わらない生活。

なんてつまらない世界なんだろう。そんな事を思いながら、一人家路に着く。

第1話

俺の家は住宅街にぽつんとある喫茶店だ。

朝はバス停の近くということもあり客足は多い。

ただいつも同じ顔ぶれ。

部活動も委員会にも入ってない俺はいつも夕方の6時頃に家に帰る。ちなみに今日は7時半だった。

忙しい時などは手伝いに出されるが、今日は手伝う気になれなかった。

家の裏口からではなくいつもの様に表の客の入り口のドアから堂々と入る。

別にこれといって意味などはないけど、寧ろ裏から入らなければいけないのだが

自分の家なのに裏口から入らなければならないのは何かに負けた気がして嫌だった。

小さい男なのだ。

「おかえり、たーちゃん」

高校生にもなった息子をちゃん付けして呼ぶ俺の母親。

なんでも小さい頃から　ちゃん、と子供を呼びたかったらしく俺をこの名前にしたらしい。

たらちゃんではなくて本当に良かったと思う。

「ん」

いつもの様に素っ気無い返事をし、二階にある自室へと向かった。

鞆を椅子に置きベッドの上で横になっていると母親の声が聞こえた。

「たーちゃん、今日は葵ちゃんは来ないの？」

知り合ってから毎日の様にうちの店に来ては母親と話していた。

元々、田舎に居た時から家が近く、息子と年齢も近いので母と仲が

良かったのだが、

こっちで再会した葵が大人になったのか料理の話などで今は毎日盛り上がっていた記憶がある。

そのため、たまに店を手伝ったりもしていた。

「別にいつも来るわけじゃないだろ」

「いつもは殆ど来てるじゃない」

ああ言えばこう言う母である。

説明するのもめんどくさいので知らない、と答えた。

「そんな事ばかり言っていると愛想尽かされちゃうわよ?」

別に好いてもいない女に愛想を尽かされるからってどうなんだと思
い、

ご飯を軽く済ませ重たい瞼を閉じた。

制服を着っぱなしという事も忘れて。

次の日、朝から家の手伝いに駆り出される。案の定制服はしわしわだった。

学校が休みで本当に良かった。

休日だけあって平日のバスが来てしまっ、早く早く!という感じはないが、やっぱり忙しい。

こんな休みの日に一体何しにうちの店に来ているんだか。本当に暇な人達だと思う。

もちろん居るのは殆どが顔なじみ。そのせいもあってか顔と名前がほとんど分かってしてしまう。

来ていない人も。

俺はコーヒーを出したり軽食を運んだりする仕事なのだが、

店はそんなに狭くはないのだけれど同じ場所をぐるぐると回ったり、お皿を下げたりしなければならなかったため結構足を使う。

親父のようにコーヒーやら何やらを作るほうで疲れないだろうなあ

と毎回思う。

しかし親父に俺がコーヒーとか作る、と言うとことごとく

「お前はまだコーヒーのコの字も知らないだろ。後10年は早い」と却下され入れてくれないのだ。

たかだかコーヒー作るのに10年の歳月を費やさなければいけないのかと思うとアホくさくなる。

俺はずっと運ぶ係りでいいと思う。

昼近くになり店が落ち着いたところで母に昼ご飯の買出しを頼まれた。

昼飯を食べるためだとしぶしぶ承諾し、外に出た。そして雨が降っていたので傘をとり家に舞い戻った。

家から15分ほど歩いたところにあるスーパーに向かう。

今日はなんて足を使う日なのだろうか。

頼まれていた買い物を済ませ店を出るとまだ雨が降っていた。

今日の降水確率はどれぐらいだったろうと昨日の記憶を蘇えらせるがテレビなど見てないと気付く。

そこに傘も差さずに歩いている着物を着た少女がいた。

身長からして小学生低学年位だろうか。それ以前に今日祭りなんてあったのだろうかなど考えるも

気にせず通り過ぎた。

ベチャッ

と人かが倒れるが聞こえた。

人ってこんなに綺麗に倒れる音がするんだと関心しながら振り向くと着物を着た少女がうつ伏せになっていた。

仕方なく一番近くに居た俺が大丈夫か?と尋ねるも返事はなし。

なんだか周りからの冷たい視線に気付く。

俺が倒したことになるのかなんという冷たい視線。
その場に居ずらくなり逃げるように少女を連れて家に向かった。
何も悪いことなどしてないのになんでこんなヤンキーに絡まれた人が助けを求めているのに冷めた目で見られてるような
仕打ちを受けなければいけないかったのか、未だに謎だった。

第2話

雨の中傘も差さずに走ればそれなりに濡れるものだ。

そんなことは分かっていたのだが、そうせざる負えない状況というものもある。

少女を背負い濡れる事など考えずに走る。

先ほどの人からの冷たい目線に比べればまだ涼しい。

幸い、今は夏だ。初夏というべきか、気温はそれほど低くない。

しかし水が湿っていく衣服の感触がやけに気持ち悪い。

少しでも早くこの感覚から逃れようと必死に走る。

少女のためでなく、この気持ち悪さから早く開放されるがために。

家に着くと客は一人もいなかった。かなり助かる。

母親に事情を説明しようと探すが、あちらが先に俺を見つけた。

「・・・たーちゃんびしょ濡れじゃない、傘はどうしたの」

そっちか。もつと他にあるだる気付くべき場所が。

「この子、この子」

と背中の子に注目させた。

「あら、どうしたのその子」

事情を一から説明すると母親は二階の俺の部屋に布団を敷き少女の着物を脱がせ寝かせた。

なんと落ち着いた態度をとるのか。

そして何事も無かったかのように昼ごはんの支度を始めた。

雨で濡れた材料で。

夜になると自室からバタバタバタッと激しい音が聞こえた。

様子を見に部屋に入る。

「な、なんだお前、ここどこだ」

「ここは俺の部屋だ」

パニックを起こしている少女に何の説明もなく自分の部屋だと答える。

間違った事は言っていない。夢でなければここは俺の部屋だからだ。

「お前だれだ！」

もつともな質問だ。この場所しか説明していない。

ふじみたすけ
「藤見太祐」

とりあえず名乗っておいた。

「ふじみ、たすけ？」

「ああ」

「………なんだお前はっ！！なんでここに私が！？」

バタバタと騒がしい最中、母がすすつと介入し、なんとも落ち着いた感じで説明した。

「………ありがとうございます」

パニックも納まり、親父が自慢の飲み物を持って飲ませた。

「私が作った自慢の抹茶クリームホットだ。体が温まるから飲みなさい」

すんなりと受け取り息で冷ましながら一口、コクリ。

間髪入れず

「まずいつ！！」

親父は酷く落ち込んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4193d/>

ある雨の降る丘に。

2011年1月12日14時26分発行